

うたかた

上

渡辺淳一



講談社

うたかた上

1990年7月14日 第1刷発行

著者 渡辺淳一

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二ノ郵便番号一―二〇一
電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価 一二〇〇円(本体一一六五円)

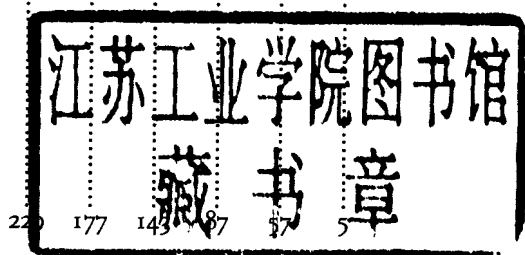


落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本
についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてに、
お願いいたします。

© Junichi Watanabe 1990. Printed in Japan

ISBN4-06-205003-X (文1)

冷夏	白夜	綠陰	花冷	春曉	淺春	目次
.....						



う
た
か
た
上

浅
春

樹の間に海が光っている。

畳敷きの広縁の前には椿の植込みがあり、その先に百日紅の枝が延びて、正面の海を区切っている。

安芸隆之はこの部屋からの眺めが気に入っていた。

海に向かって開かれた和室からは、周りを取り巻く樹々とともに、四季それぞれの風情を楽しむことができる。

だがなかでも安芸が気に入っているのは、春が浅いころのこの部屋からの眺めであった。

東京ではまだ冷え込みが厳しく、ときに雪さえ見るのに、ここにはすでに春が訪れている。

今度、この宿をたずねる気になったのも、一足早く春の息吹きに触れたくなったからである。そしていま一つ、浅見抄子を伴うという目的もあった。

どういうわけか、抄子が一日だけ遠出ができるといったとき、安芸は即座に伊豆山のこの宿を思い出した。

「熱海から車で十分もかからない、ひっそりとした旅館だ」

安芸の説明に、抄子は軽くうなずいた。

「蓬萊ほうらいという。中国のいい伝えでは、東方の海上にあって、仙人が住む不老不死の理想郷だという事になっている」

「じゃあ、行ったら帰れなくなりますね」

「そうだ、帰れない」

帰れなくなるといっても、抄子が本心からそう思っていないことはあきらかだった。

だが安芸は半ば本気で、それが現実になることを想像していた。

「前から、一緒にきたいと思っていた」

安芸は縁先に近い陽だまりに坐すわって、煙草たばこに火をつけた。

「ここまでくれば、安心だ」

「安心？」

「そう思わないか」

部屋は急な斜面の中腹にあって、眼下には楠くすのぎや山桃などの巨木が茂っている。

「おだやかな海だわ」

海を見ている抄子のマスカットグリーンズのツーピースが、春の陽を受けてやわらかい。部屋で二人だけになって、抄子はようやく落着いたようである。

突然、左手の樹間で鋭い啼なき声がして鳥が飛び去っていく。尾が細く長かったところをみると、百舌もずかもしれない。

安芸が縁先^{えんさき}に身をのり出すと、抄子も上体をかがめた。椿の植込みの先は急な傾斜^{けいせつ}になっているので、上から覗き込む形になる。

「あんなに、光っているわ」

崖^{がけ}の下はすぐ海になり、樹の葉のあいだから見える水面が小刻みに光りを照り返している。

「大分、陽が傾いてきた」

「四時を少し過ぎました」

抄子が腕時計を見て答えた。安芸は喫^すいかけの煙草を揉み消して空を見た。

正面の植込みの先にある百日紅^{さるすべり}が、曲りくねった梢^{こすえ}を宙に突き出し、その果てに色づきはじめた空がある。まだ寒^{かん}のうちなのに、空は水蒸気を含んだように湿っている。

「もう、春の空だ」

「東京とは、違うわ」

安芸は「春めく」という言葉を思い出した。春は梢の果ての空にとどまっている。

「長年、外国で過した人がここへくると、忘れていた日本の風景があるといって二、三日、暢^のんびり休んでいくらしい」

「その気持、なんとなくわかります」

「われわれも、そうしようか……」

抄子がふいと目をそらした。一夜泊ることさえようやくなのに、三日も四日もいられるわけはない。抄子はそういいたかったのかもしれない。

「ご免なさい」

「君が謝ることはない」

抄子が入妻であることを、安芸は初めから知っていた。それを承知で、つい我儘をいいたくなっただけである。

「あなたは、ずっとここにいたいのでしょうか」

「そんなことはないが……」

当座、原稿を書くだけの仕事なら、この宿でできないことはなかった。

「ここなら、海が見えて気持も安まるでしょう」

「気持が安まっても、一人では仕方がない」

抄子と海の見えるところで過したいと、安芸は何度か思ったことがある。だがそれが容易にかなえられないことも、安芸は知っていた。

部屋の右手は大きな山茶花と金木犀の茂みになり、その先に芝生の庭がある。玄関のある本屋から数寄屋造りの客室へ続く、渡り廊下に囲まれた中庭だが、急な斜面にできた平地だけに開放感がある。

二人は廊下の端に揃えてあった草履をかりて、芝生の先まで行ってみた。

ここまですると真下に湯屋の屋根が見え、右手の急な斜面にそって湯屋までの渡り廊下が延びている。

「この下の湯は走り湯といって、昔は山肌から直接、海に噴き出していたらしい」

安芸は何度か、その湯にもつかっている。

「このあたりは源氏に由緒の深い土地で、流人であった頼朝が北条政子と逢引きした、逢初橋

という橋もあるらしい」

抄子がかすかに笑ったので、安芸がきき返した。

「おかしい？」

「頼朝という人のイメージと、逢引きというのが合わないような気がして……」

「たしかにそうだが、頼朝の若い時のことだろう」

「あれは、桜でしょうか」

湯屋へ続く渡り廊下の先に、一本だけ花を咲かせた樹がある。

「緋寒桜じゃないかな」

「やっぱり、温かいんだわ」

やや水蒸気を含んだ空が西の方から暮れかけている。

「あちらが伊豆半島だ」

正面の相模湾をつつむように、右に岬が突き出ている。手前の濃く見える先端が船着場で、その奥の紫色に霞んでいるところは網代だときいたことがある。

「正面に平たく見えるのが初島で、その先に薄く見えるのが大島だ。晴れていると、ここからでも噴煙が見える」

「ずいぶん、近いのですね」

抄子が額に手を当てて目を細める。やわらかく開かれたスーツの胸元が、三十五歳の女の成熟を思わせる。

「こんな穏やかな日も、珍しい」

二人の前には椿と皐月きげきの植込みがあり、その先に八重水仙が小さな花を咲かせている。
「連れてきてもらって、よかったわ」

海に向かって髪をかきあげる抄子の横顔には、夫を裏切つて旅に出ている翳かげりはない。

夕暮れの海を見て部屋へ戻ると、安芸は宿の浴衣ゆかたを着て羽織を重ねた。

「下の風呂ふろへ行ってみよう」

夕食までには一時間ほどあるので、湯につかるには丁度いい時間である。

「この宿自慢の総檜そうひのきの風呂だ。湯につかりながら、暮れていく相模湾を見るのも悪くはない」
「でも、お風呂は一つでしょう」

走り湯という野趣を生かしたもののなので男女の区別はなく、女性の入浴時間だけが定められている。六時を過ぎたいまは男性の時間帯である。

「さっき、湯屋に電話をしたら、誰も入っていないといっていた」

客室は二十に満たない宿で、各々の部屋にも檜の内風呂が備えられているので、走り湯まで行く人は、あまり多くはない。

「行ってみよう、内風呂より向こうのほうがゆったりする」

抄子とはすでに一度、一緒に風呂に入っている。半月前、安芸の原宿のマンションで逢ったあと、抄子がシャワーを浴びているときに強引に忍び込んだのである。

「とにかく湯屋まで行ってみよう。途中の道も風情がある」

抄子はようやく納得したようである。

離れで服を脱ぎはじめたが、やがて白地に藍の花柄の浮いた浴衣を着て現れた。

「それは、君がデザインしたのだね」

「おかしいですか？」

「いや素敵だ、白地に浮いた花が春の夜にふさわしい」

着物デザイナーの抄子は、今度の旅のために持ってきたらしい。

「少し冷えるかもしれないから、羽織を着たほうがいい」

抄子は身長はさほど高くはないが、すらりとして着痩せする。その背に羽織を重ねてタオルを持つ。

安芸の脳裏に一瞬、他人の妻を盗んでいるという思いが横切る。

湯屋までの径は急峻な傾斜にそって石段になり、片側は檜の構いが続き、上は杉皮の天井がおおっている。途中、斜面に繁茂する自然の樹木を生かすために、ところどころに巨木の根元が露出して、それがいっそう野趣をかきたてる。

石段の左右には行灯が置かれて足元を照らす、樹間から覗く空はまだ夕暮れの名残りとどめている。部屋から見下しているときは、樹木が繁茂しているだけと思われた斜面には、鉄やフェニックスとともに鬼羊歯やハツ手が入り混っている。椰子のような暖い土地の植物と一緒に小さな熊笹が密生しているところが面白い。

石段の半ばまで下りて振り返ると、巨木が天に向かって枝を広げている。夕暮れのなかでも、やや黄ばんで見えるのは楠の木で、濃い緑は山桃らしい。

「蜜柑がなってるわ」

抄子が斜面の中程を指さすが、よく見ると橙^{だいだい}である。

少し前だと落日に染って鮮やかだったろうが、赤味を帯びた黄は暮れなずんだ空にもよく映える。

いま一度石段にそって曲り、置き行灯を二つ越すと湯屋の入口に着く。板戸を開けてなかに入っていくと、やはり誰もいない。抄子がなお戸惑^{とまど}っていると、湯屋番の老爺^{おやぢ}が顔を出した。

「大丈夫ですよ、もう他のお客さまは見えないと思います」

安芸が浴衣を脱ぎはじめると、抄子も決心したらしい。籠^{かご}にタオルを置き、帯を解きはじめる。

安芸は先に入って、湯舟に身を沈めた。

この走り湯はカリウムやナトリウムなど塩化物を含んでいるというが、無色透明で肌にすべすべした感じである。

肩まで湯に浸って見上げると、総檜で組立てられた天井は七、八メートルはあり、そこから下っている四つの円ガラスにつつまれた電球が湯に煙っている。

安芸は両肢^{ふたぢ}を伸ばして湯槽の縁に背を凭^{もた}せた。

正面の大きくくり抜かれた窓からは、繁みをとおして相模湾が一望の下に納められる。空はすでに暮れているが、海面は意外に明るい。そのまま夜の海を眺めていると、湯殿の板戸を開けて抄子が入ってきた。

広い浴槽には常に湯水があふれ、檜^{ひのき}の簀子^{すのこ}に音もなく流れていく。

脱衣所と境いする板戸はあいたが、抄子が入ってくる気配がないので振り返ると、湯殿の入

口で、浴衣を着たまま蹲しゃがみこんでいる。

「すぐ、明るいね」

抄子はなかの明るさに戸惑ったようである。

「かまわない、入ったらいい」

「でも、やっぱりやめます」

抄子は決心したように立上った。

「誰か、くるかもしれません」

「心配ないよ、さつき湯屋番の人も大丈夫といったろう」

「でも、万一ということがあります」

抄子はそっくりいながら、なお珍しそうに湯殿を眺めている。

「少し塩分を含んでいるらしいが、湯がつるつるしてあたたかい。せっかくきたんだから食事の前に一風呂浴びたほうがいい」

「わたし、お部屋のお風呂に入っています」

いまは他の客はいないが、このあとも絶対こないという保証はない。万一きたときに、二人で入っているのは慌わづてることになる。

「残念だな……」

安芸は心残りだが、一度入らないと決めたからには入りそうもない。そういうところはきっぱりしている女である。

「じゃあ、夜中に一緒にこようか」

「あなたがお休みになってから、一人できます」

「いや、そのときには目を醒ます」

深夜、二人で湯につかりながら夜の海を眺めるのも悪くはない。

「それでは、お部屋に戻っています」

抄子が湯殿の戸を閉めて去っていく。

そのうしろ姿がガラスの先に消えるのを見届けて、安芸は一つ溜息をついた。

相変らず要心深いが、今度の旅のことを、抄子は夫にどのように告げてきたのだろうか。

抄子を初めて知ったのは、いまから一年半前であった。

秋の新作着物の展示会が日比谷のホテルであったとき、安芸はなに気なく寄ってみた。

展示の中心は女性のものであったが、男もののコーナーもあり、そこに一点、利休鼠の結城紬に深い緑の帯が添えられていた。その落着いた色合いに惹かれて眺めていると、女性の店員が近づいてきた。

「いかがですか」

安芸は着物が好きで、家でくつろぐときや食事に出かけるときなどによく着物を着る。作家という仕事から、着るものは自由であった。

「よろしかったら、お当てになってみませんか」

店員はメーカーから派遣されてきているらしく、慣れた手つきで反物を安芸の肩に当てようとする。